

ひたる アート

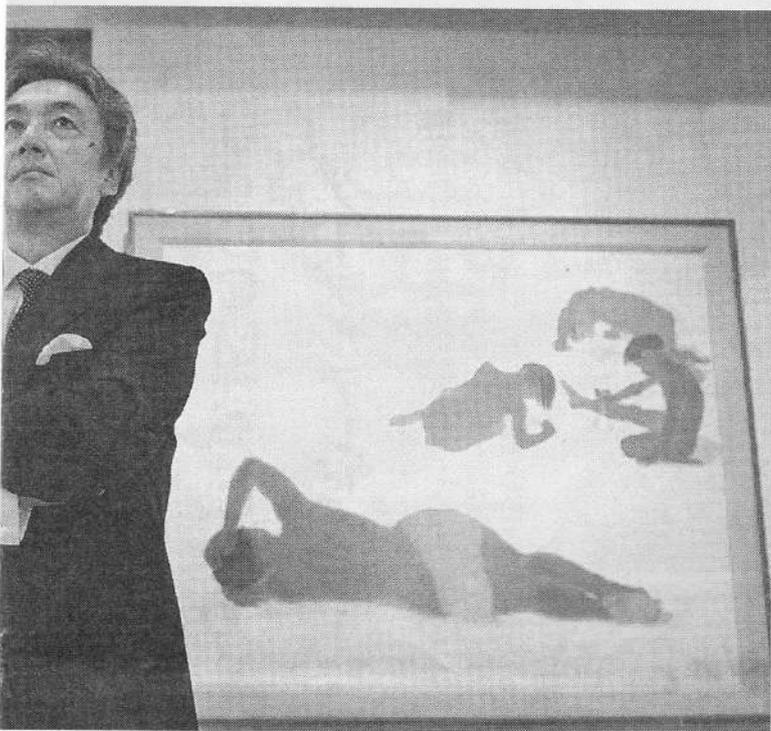
交わる ビーブル

知るカルチャー
Thursday

楽しむ スポーツ

役立つ ライフ

んと行く京都画壇の展覧会



の前に立つ千住博さん(京都市左京区の京都市美術館)

虚勢排した真実新鮮

「僕も京都の流れにいる」

江戸時代の円山応挙を源流とし、連綿と続く京都画壇。明治以降は竹内栖鳳、土田麦僊、上村松園ら多彩な日本画家を輩出した。伝統ある京都画壇に根付く美意識とは何なのか。その流れをたどる「京都と近代日本画」展(京都市美術館、十二月九日まで)の会場を、日本画家で京都造形芸術大学の千住博さんと歩いた。

雨が降りしきるなか、京都 ている。時折ファンから声を
・岡崎の京都市美術館へ行く かけられ、握手を求められる
と、千住さんはすでに展示室 と気さくに応じていた。
にいた。黒のスーツをすつき 会場には明治から戦前にか
りと着こなし、熱心に絵を見 けての日本画約百二十点が展

示されている。一緒に会場を
一通り回った後、「これとい
う作品を一つ選んでくださ
い」と頼んだ。「一つは難し
いな」。千住さんは笑いなが
ら、再び展示室を見て回る。
そして縦一・五ほどの作品
の前で立ち止まった。秋野不

矩(ふく)の「砂上」(一九
三六年)。
「子どもの髪動きひとつ
取ってみても生き生きとして
いて、一人ひとりの個性を描
き分けている。全く古さ感
じないのは、人間そのものを
描いているから。民族を超え
た普遍的な絵だ
と思います」

「京都の日本画は東京のそ
れとは対極にあると思う」と
千住さん。「豪快でダイナミ
ックなのが東京だとすれば、
京都は繊細。人間のはかなさ
も含めて真実に迫っている。
だから今見ても新鮮さがあ
る」。その背景には、それぞ
れの近代化の仕方も無視でき
ないとか。明治以降、西洋美
術が流入し、「東京の画壇は
世界と肩を並べないといけな
い」という気負いからか、虚勢
を張っていたようにみえる。

「素晴らしい。すべてのモ
チーフが主役となり、調和し
ている。知らなかったけど、
こんないい絵があるんです
ね。生涯に一度でいいから、
こんな絵を描きたい」。京都
には栖鳳、麦僊らきら星のよ
うな逸材がいたが、あまり知
られていない画家にも名作が
あり、また京都画壇の層の厚
さを教わった気がした。

「秋野先生と
親交はなかった
けど、なじみの
ある巨匠」と振
り返る。千住さんがかつて所
属していた「創画会」の前身、
「創造美術」の設立会員だっ
たからだ。秋野は二〇〇一年
に九十三歳で亡くなるまで、
インドの風景画にも取り組む
など日本画の革新に挑み続け

「砂上」の近くには、同じ
く創造美術の設立会員、上村
松篁の「山鹿」(一九三六年)
があり、この作品も候補の
一つだった。「これもいいで
すよね。雪や山鹿の質感が丁
寧に描かれている。これ以上
の出来はないでしょう」

「東京で生まれ育った千住さ
んだが、展示作を見ていて懐
かしい気持ちになったとい
う。千住さんは戦国時代の京
都の豪商、角倉(すみ)の(ら
了)以の血を引く。「DNAで
しようか。東京の絵より親し
みが感じられ、最初の一作か
らくぎ付けになった。それに
京都のこの流れのなかに僕も
いるんだと再認識した」
ゆっくりと展示作を見て歩
く千住さんが、ふと歩みを止
めた。眼前には木島椋谷(こ
のしま・おつこ)の「寒月」
(二年)。六曲一双の屏風
(びょうぶ)で、雪景色の竹
林の中をキツネが歩いている。
木島は明治から昭和にか
けて活動した画家らしい。

ぶんか 探訪

画家。1958年、東京
住。東京芸術大学大
いた「ウォーターフ
掛け、95年のベネチ
アの絵画部門優秀賞。
のふすま絵を制作。
大学長。弟の明さん
はバイオリニスト。



絵は個性的だし、世界でも通
じやない。だから、これらの

千住さんは帰り際、売店で
上村松篁の「山鹿」の小さな
複製画を買い求めた。「アト
リエに飾るつもり。鹿を描く
ときの参考にね」。終始、真
剣な面持ちだった千住さんの
表情がゆるんだ。